



Q & Aでわかる『みんなの保健』 編集部.....	1
がん教育の推進と実践に向けて【実践編】 助友裕子.....	5
ベースボール型教材としての「クリケット的要素」の可能性 —後編— 石塚 諭.....	9
with Sports ちょんまげ隊長ツンさん サッカー-日本代表サポーター.....	12

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子どもたちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

Q&Aでわかる『みんなの保健』 —2020年度用小学校保健教科書について—

学研教育みらい 編集部

※この内容は、2020年度用小学校保健教科書内容解説資料として、(一社)教科書協会の教科書発行者行動規範に則って作成しています。

はじめに

今回の学習指導要領改訂では、育成すべき資質・能力を明確にしています。特に、指導内容を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」として整理し、各教科の学習を通じて、教科ごとの資質・能力を身に付けることに加え、教科の枠組みを超えた汎用的な資質・能力を高めることを求めています。

「主体的・対話的で深い学び」という言葉に表されるように、学習内容の見直しというよりも、指導の仕方（授業の進め方）の見直しが強調されていると捉えることもできます。

また、キーワードともいえる「見方・考え方」は、この汎用的な資質・能力と各教科の内容をつなぐものとして示されているだけでなく、これによって各教科の自律性が示されているものといえます。

2020年度用の教科書は、新学習指導要領に基づく最初の教科書となります。学研教育みらいでは、2020年度用の教科書について、新学習指導要領の理念を実現すべく、学習の進め方（指導の仕方）の改革に重点を置いて見直し、さらに社会の変化を踏まえて改訂を行いました。

ここでは、学研教育みらい発行の2020年度用『みんなの保健』（224学研 保健305／保健505）の特長について、Q&A形式でわかりやすく提示します。

Q 学習の進め方（指導の仕方）について、どんな工夫をしていますか？



教科書全体の構成では、全ての時間を1時間2ページとしています。内容を基礎・基本に厳選し、学習課題の発見から、その解決に向けた発問・作業課題を効果的に配置し、**主体的・対話的で深い学びを進めやすく**しています。学習の進め方は、**教科書の冒頭でわかりやすく示**ています。

1時間の構成では、

- ① 学習内容を確認する。
- ② 課題をつかむ、わからないことに気付く。
- ③ 解決に向けて考えたり、調べたり、話し合ったりする。
- ④ 本文を読んで、知識の確認をする。
- ⑤ 学習したことをまとめたり、教え合ったり発表したりする。

また、自分の生活につなげる。

といった基本的な流れに沿った配置・構成となっています。

このように、構成そのものが学習の進め方などを表しており、**誰にとっても学びやすく、教えやすい教科書**となっています。

児童の興味・関心や実態に応じて深い学びにつなげる内容については、「もっと知りたい・調べたい」のページに掲載しています。

●学習の進め方についてのページ



5・6年 p.3

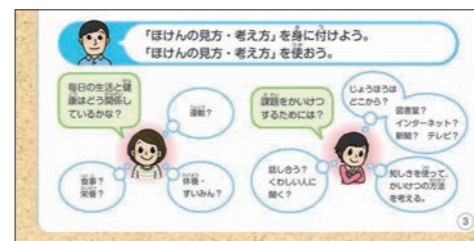
教科書の冒頭で、学習する際に見方・考え方を身に付けたり働かせたりすることを示している。(p.3参照)

Q 見方・考え方を働かせるために、どんな工夫をしていますか？



教科書冒頭 (p.3)、各章のとびらにおいて、**児童の発言の形で見方・考え方を働かせている様子**を示し、**どのように考えたり話し合ったりするかがわかる**ようにしています。また、各時間の発問や作業課題で**具体的に考え方や活動の行い方を示したり、児童が考えている様子**を示したりしています。

●見方・考え方を働かせている例



3・4年 p.3

●各章のとびらでの見方・考え方を働かせている例



3・4年 p.5

5・6年 p.33

Q 心の健康やいじめについては、どのように取り扱っていますか？



5年の「心の健康」において、**いじめを取り扱っています**。いじめについて、さまざまな立場・視点から考えられるように構成しています。また、**さまざまな相談窓口があることを紹介**しています。不安や悩みへの対処の仕方として位置づけられた**技能（呼吸法など）**についても詳しく取り扱っています。

●相談窓口



5・6年 p.16

●呼吸法などの技能



5・6年 p.14

●いじめに関する内容



5・6年 p.17

●学習の進め方に沿った、配置・構成



5・6年 p.12～13

課題の解決に向けて、考えたり、話し合ったりする学習

運動領域との関連を図るためのガイド

新設された「技能」へのガイド

知識をまとめ、教え合ったり、生活に生かしたりする課題

※この内容は、2020年度用小学校保健教科書内容解説資料として、(一社)教科書協会の教科書発行者行動規範に則って作成しています。

※この内容は、2020年度用小学校保健教科書内容解説資料として、(一社)教科書協会の教科書発行者行動規範に則って作成しています。



がん教育の推進と実践に向けて【実践編】 —社会に開かれた教育課程の実現—

日本女子体育大学教授 ● 助友裕子

1 がん教育で「社会に開かれた教育課程」の実現を

前号（第3号：2019年1月発行）では、理論編として「なぜ、今がん教育なのか？」を論じた。疾病等のリスクという概念を理解できるようにするとともに、自他の健康の保持増進だけでなく回復を目指して学習過程を工夫する必要があることについて触れた。そのために、教科等横断的な取り組みが必要となることも提示した。そこで今号では、新学習指導要領の前文で示された「社会に開かれた教育課程」の実現と合わせて、がん教育をどのように実践することができるのか、その手だてを紹介する。

「社会に開かれた教育課程」は、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むために求められるものである。この実現には、各学校におけるカリキュラム・マネジメントが鍵となる。中央教育審議会答申（2016（平成28）年12月21日）では、次のように述べられている。

- 〈カリキュラム・マネジメントの3つの側面〉
- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
 - ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
 - ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

（中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016（平成28）年12月21日、下線部は筆者による）

Step1 がん教育の内容を組織的に配列する

教育委員会主催の教員研修などにお邪魔すると、先生方ががん教育を進めるに当たっての困り事として掲げる事柄に、まず校内の教職員の連携体制が挙がる（図1）。

関心を持って研修に参加してみたものの、自分だけが知識を持ち帰ったところで、すぐに実施できる気がしないという。そこで、その問題を解決するための話し合いを重ねてみると、職員会議などで研修の報告をしたり話題に挙げたりすることから始まり、非公式なものではお茶でも飲みながら同僚に相談してみようということになる。



図1 教員研修参加者から得られたがん教育の困り事と解決策の一例（2017年11月実施：主催 長野県教育委員会）

Q がんに関する内容については、どのように取り扱っていますか？

6年の「病気の予防」において、生活習慣病の学習に関連した発展的な学習内容としてがんを取り上げています。近年推進されているがん教育の内容や現状を踏まえて、「もっと知りたい・調べたい」で、学校医や地域の教育力の活用を視野に、専門家が答える形式で構成しています。

Q 防災や安全については、どのように取り扱っていますか？

学研教育みらいの教科書ではこれまで、5年の「けがの防止」において、「身の回りの生活の危険が原因となって起こるけがとその防止」の発展的な学習内容として取り扱ってきました。今回はそれを課題解決的な学習として展開できるようにしています。

「自助・共助・公助」の考えを基に、状況や情報を基に何をすべきか、何ができるかを考えられるようにしています。

3・4年でも、巻末に「外出するときの安全」という資料を掲載し、防災（と防犯）に触れています。

●がんに関する内容



5・6年 p.44

●防災に関する内容



3・4年 p.36



5・6年 p.28～29

※この内容は、2020年度用小学校保健教科書内容解説資料として、(一社)教科書協会の教科書発行者行動規範に則って作成しています。



現代の教員には、多忙化の中にも「同僚性」を高めた職務遂行が期待されている。ここでの同僚性とは、教員同士が共に学び合いながら常に成長し続けられるような関係性を意味し、「教師の職能を高め合う関係性」「教師集団として協働する関係性」「教師間の友好的な関係性」に整理される¹⁾。表1は、その同僚性を高めるための行動プランである。現在のご自身の行動に当てはまるものをチェックし、ご自身の得意な行動と思われるものを継続していただき、その際にがん教育を話題として取り上げてみるとよいだろう。

表1 同僚性チェック項目

<p>「教師の職能を高め合う関係性」</p> <p><input type="checkbox"/> 授業を観察し合い、意見を交流する。</p> <p><input type="checkbox"/> 自主的な研修に積極的に参加し、交流する。</p> <p><input type="checkbox"/> 新たな取り組みを始めるときは、他の学級に与える影響を考慮する。</p> <p><input type="checkbox"/> 道徳・人権など多様な価値観を含む指導に当たっては、他の教員の意見を聞く。</p>
<p>「教師集団として協働する関係性」</p> <p><input type="checkbox"/> 考えや価値観が異なる相手にも積極的に接する。</p> <p><input type="checkbox"/> 一人一人の個性を尊重し、どの教員にも好意的に接する。</p> <p><input type="checkbox"/> 管理職の立場を理解し、協力する。</p> <p><input type="checkbox"/> 管理職と積極的に意見を交流する。</p>
<p>「教師間の友好的な関係性」</p> <p><input type="checkbox"/> 自らの教材のアイデアなどを教え合う。</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの他愛もない行動について話をする。</p> <p><input type="checkbox"/> 保護者や地域の方々についての話をする。</p> <p><input type="checkbox"/> 普段から他の教員に挨拶をしたり、話しかけたりする。</p> <p style="text-align: right;">(後藤 2016¹⁾ より作成)</p>

健康教育がそうであるように、がん教育も学校教育活動全体という視点を必要とする。とはいえ、まずは保健領域・保健分野+αの2コマから始め、味方を率いて少しずつチームを大きくするという考え方もある。これまではがんの予防については保健で、回復については道徳や総合的な学習の時間、特別活動などで扱うといった事例が多く報告されている。

Step2 地域などの外部の資源を探す

がん教育で用いられる「資源」は、地域に存在する

物理的資源と人的資源に分けて考えることができる。さらに、家庭との連携も不可欠である。

Step2-1 物理的資源としての地域のがん検診事業

物理的資源とは、主に教材研究の際に必要なとされる素材のことである。具体的には、小学校の「地域のさまざまな保健活動の取り組み」、中学校の「個人の健康を守る社会の取り組み」、あるいは新設された「がんの予防」で、自治体が発行しているがん検診の内容を取り上げることなどが考えられる。がん検診の必要性や有効性については、各種教材で取り上げられているものの、その実施方法は地域によってさまざまである。自治体保健センター等で検診車を手配するなど集団型検診を実施していることもあれば、受診者が複数の医療機関の中から選択して受診する個別型検診を実施していることもある。さらに、検診する体の部位によっても実施方法は異なるし、費用もさまざまである(無料~数千円のところが多い)。成人を対象とした乳がん検診受診行動についての研究では、検診内容を対象者が理解したうえで情報提供することにより、その受診率が向上することが明らかになっている²⁾。したがって、児童生徒を対象としたがん教育でも、地域特性に応じたより具体的な教材を提示することで、がん検診を受診してみようとか、身近な大人に伝えてみようといった、より深い学びを促すことができるかもしれない。なお、自治体のがん検診については、インターネット上で「(自治体名)市 がん検診」などと検索するとヒットする場合が多い。自治体の広報誌などで扱っていることもあるが、保健センターなどに直接問い合わせてみるのがいちばんの近道であろう。

Step2-2 人的資源としての外部講師の活用

もう一つの「資源」である人的資源は、がん教育外部講師となる人材である。保健が必修化されていない欧米では、健康教育は民間機関の出前型授業に依存するところが多分にある。その点、日本では教員が指導の担い手であるから、文部科学省がん教育推進のための教材 (http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1370005.htm, 2019年3月現在) などで、がん体験者の語り動画を活用し、外部講師を必要とし

ないという選択もある。ただし、それだけがん教育には、外部講師の有用性が期待されていることを念頭におく必要はありそうだ。

筆者らが、がん教育の実施前後に対象とした6学年児童に質問紙調査を行ったところ、がん患者に対するイメージを尋ねたいくつかの選択肢のうち「たばこやお酒をやりすぎた人」を選択した者の割合は、授業前の35.7%から授業後に56.6%と大幅に増加した。この結果をさらに分析してみると、外部講師による指導を受けた児童グループのほうが教員のみによる指導を受けた児童グループよりも、事後調査での当該項目の選択割合が統計的に有意に低いことがわかった³⁾。がん教育では、がんのリスク要因として喫煙や飲酒について学ぶが、当事者であるすべてのがん患者が不健康な生活習慣を送っていたわけではないという事実も理解する必要がある。この研究結果から、患者などの外部講師を活用することは、がん教育上有用であると説明することができる。

外部講師は、表2のような種類が考えられる。がん医療専門家がいたり、当事者によって運営される患者サロンが設置されていたりするがん専門病院は、国立がん研究センターの「がん情報サービス ganjoho.jp」から検索することができるので、アクセスしていただきたい。文部科学省が平成29年度末に実施したがん教育実施状況調査結果によると、がん教育を実施したと回答した学校は、全37,401校中21,239校(56.8%)で、そのうち外部講師を「活用した」と回答した学校は、2,676校(12.6%)と非常に少なかっ

表2 がん教育外部講師の種類

<p>がん医療専門家</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がん診療連携拠点病院 ・学校医などの医師会 ・都道府県が独自に指定するがん専門病院
<p>がん患者・体験者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がん患者会 ・がんサロン(ピアサポーター)
<p>がん検診など地域の保健活動従事者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自治体保健センター(自治体健康づくり担当部署) ・都道府県など保健所

たのが現状である。

Step2-3 家庭との連携が鍵

地域だけでなく、指導する対象となる児童生徒の家庭との連携も不可欠である。特に、次のような児童生徒がいた場合は、配慮が必要である。

〈自身が小児がん患児または経験者〉

小児がんは、生活習慣が原因となる疾病ではないため、がんのリスク要因として生活習慣を取り上げる際は、特に注意が必要である。また、小児がん患児自身の教育、自立を促すための支援、家族に向けた長期的支援や配慮が必要である。小児がんのステージ(診断時、入院中、復学後、ターミナル)に応じた教育支援に関するガイドライン⁴⁾がウェブサイトに掲載されているので、参照されたい。

〈身内にがん患者のいる児童生徒〉

18歳未満の子どもをもつがん患者の全国推定値は、年間56,143人、うち過半数が12歳以下であるとされている⁵⁾。そのような子どもは、すでに家族をがんで亡くした子どもよりもストレス度合いが高く、さまざまな側面からケアが必要であるとされている。そのような子どもを支援するための教育プログラムや情報提供サイトの利用が有用である⁶⁾。

上記以外にも配慮を要する事項はあるものの、がん教育実施に際し画一化された対応方法はまだない。しかし、これまでの実践事例から学ぶと、次ページの図2のような流れで進めるのがよさそうである。実際の学校現場でがん教育実施に当たり配慮を要する対象者の有無を把握することは困難であるが、家庭との連携を図りながら指導計画をブラッシュアップしていくとよい。

Step3 PDCAサイクルの視点で整理する

PDCAとは、Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の頭文字を表す。PDCAは、学校評価を行う際に推奨されているが、よりよい教育活動を展開するために、この枠組みに沿って計画的に授業評価を行えるようにする。

筆者らは、がん教育の対象である6学年児童に加え



ベースボール型教材としての「クリケット的要素」の可能性 —後編—

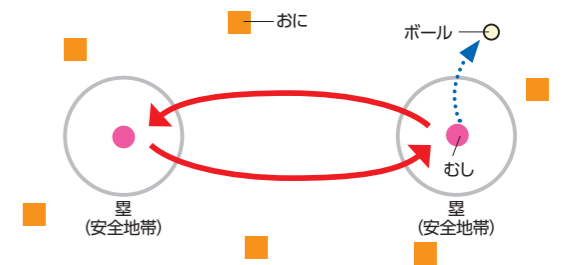
宇都宮大学講師 ● 石塚 諭

前号（2019年1月発行）では、クリケット的要素の魅力を中心にベースボール型教材について考えてみました。本稿では、その実践編を紹介し、その価値と今後の課題について考えてみたいと思います。

塁間はろくむしを行いながら子どもたちで決めさせ（概ね10m程度でした）、ボールは当たっても痛くない柔らかい素材のソフトボールを使いました。

〈2時間目〉

ろくむしが上手になると、おにがキャッチボールのミス避けるため、チャンスが少なくなります。そこで、むしがボールを投げてゲームを始めるというルールを取り入れました。その際、むしの人数を2人、おにを6人としました。2人のむしは、それぞれ反対の塁（安全地帯）にいて、お互いが入れ替わるようにして塁間を往復します。つまり、打つ代わりに投げてから始めるクリケットというイメージです。



むしの子は、できるだけ遠くにボールを投げようとするか、おにのいないところに投げようとする姿が見られました。これはベースボール型共通の「どこに打つ？」という課題をよく考えている証拠です。

その後、ボールの位置を見ながら「進塁するかどうか」を意思決定していきます。塁に留まることもできるので、進むか進まないかの意思決定は常に存在することになります。そのため、子どもたちはこのゲームに慣れてくると、互いに声をかけ合うようになりました。授業者もそのようなペアを取り上げ、勝つための方法として価値づけていました。

一方で、遠くに投げたり、360度、好きな方向を選んで投げたりできるため、おに（守備者）の位置が重要な課題になりながらも、守り切れない状況も見られました。つまり自由に投げられる攻撃方法では攻撃が有利になりすぎて勝敗の未確定性が崩れ、つまらな

1 小学校の実践例（5年生）

- (1) 単元名：クリケット風ゲーム
- (2) 実践校：栃木県佐野市立界小学校
- (3) 授業者：鮎瀬 亮 教諭
- (4) 単元計画（全4時間）

時間	内容
1	ろくむし
2	投げてから始めるろくむし
3・4	バットありろくむし（クリケット）

(5) 授業の概要

〈1時間目〉

単元の1時間目は導入として「ろくむし」を行いました（ルールは前号を参照）。ボールを当てられずに次の塁に進めるかどうかという「ボールと走者のおにごっこ」を十分に味わうことがねらいです。5年生にとって「内容が簡単すぎないか」という不安も若干ありましたが、子どもたちは夢中になって取り組んでいました。打撃という行為がなくても、「2つの塁間を往復できるかどうか」というシンプルな構造で十分におもしろさを味わえるということです。

また、子どもたちは、何度も繰り返すうちに、ボールが遠くにあるとき、すなわち、おにがミスをしたときに気づいていきます。その理解の広がりとともに、チャンスがくると大いに盛り上がる様子が見られました。



ろくむしの様子

「がん教育」実施の周知

・学校だより、保健だより、保護者会など

保護者から連絡

児童生徒（保護者）との面談

・学習内容の事前周知、カウンセリングなど

指導計画の修正

授業実施

・合理的配慮（避難場所の確保など別室受講の措置）

図2 配慮を要する児童生徒がいた場合の対応方法の例

てその保護者にも質問紙調査を実施したことがある。それによると、児童だけでなく保護者のがんリスク要因知識も向上していることが認められた。これになり、地域の成人向けがん教育プログラムでも、受講者とその家族や友人に質問紙調査を実施したが、知識の向上が認められたのは受講者のみだった。つまり、学校教育には、児童生徒の重要な他者への学びの波及効果が生じていると推測される。

その工夫の一つが、知識活用型ワークシートへの記入である。がん教育実施後に行われた児童の自由記述からは、学んだ知識を父親や母親など家族に伝えたいと回答する者、がん検診・早期発見の大切さを伝えたいと回答した者が、ともに半数近くいたとの報告がある⁷⁾。これを援用し、思考・判断したことを手紙やポスター形式で表現する活動を授業に取り入れることで、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）が促進された学習過程の一例が、この知識活用型ワークシートである。

2 がんで教えたことは何か

本稿では、がん教育が、社会に開かれた教育課程の実現に向けた一つの手段であることを前提とした。ここで強調したいのは、がん教育では、がんを教えようとするのではなく、がんで教えるもうとしている何かがあるということである。フランスの詩人であるルイ・アラゴンが、「教えるとは、共に未来を語ること。学ぶとは、誠実を胸に刻むこと。」という名言を残した。教育課程を通じて学校と地域社会が一体となり、未来を担う子どもたちに残したいものは何だろうか。

【参考文献】

- 1) 後藤壮史. 学校現場における同僚性の構成概念についての検討—教員間の関係性に着目して—. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」. 2016; 8: 19-28.
- 2) Sohl SJ, Moyer A. Tailored interventions to promote mammography screening: a meta-analytic review. Prev Med. 2007; 45: 252-261.
- 3) Yako-Suketomo H, Katanoda K, Kawamura Y, et al. Children's knowledge of cancer prevention and perceptions of cancer patients: Comparison before and after cancer education with the presence of visiting lecturer-guided class. J Cancer Educ. 2018 Aug 1. doi: 10.1007/s13187-018-1408-7. [Epub ahead of print]
- 4) がんの子どもを守る会. がんの子どもの教育支援に関するガイドライン. 2002. <http://www.ccaj-found.or.jp/>
- 5) Inoue I, Higashi T, Iwamoto M, et al. A national profile of the impact of parental cancer on their children in Japan. Cancer Epidemiology. 2015; 39(6): 838-841.
- 6) 厚生労働省支援事業 Hope Tree. <http://www.hope-tree.jp/>
- 7) 河村洋子, 助友裕子, 片野田耕太. 学童向けがん教育の開発と評価：がん教育の在り方への示唆. 熊本大学政策研究. 2010; 1: 69-84.



くなり、意欲を失う子も出てくるのです。

〈3・4時間目〉

「ろくむし」でウォーミングアップを行った後、前時の反省から攻撃方法を検討することになりました。「蹴る」や「打つ」などの案が出され、実際のゲームで試しながら考えました。手に帽子を巻きつけて打つ子が現れたこともあり、授業者はバットを登場させます。地面にペットボトルで作ったティーを置き、打つという方法が採用されました。次第に罎（カラーコーン）の上にティーをセットして打つことが主流になり、「ティーボール」のような始め方になりました。バットの登場により、攻撃側は思うように飛ばせないという未確定な要素が加わりました。

ゲームの中では、特に守りの連携プレイが頻繁に出てくるようになったのが印象的でした。具体的には、打球の方向によってどちらの罎でアウトにするのかという判断をしたり、それに合わせた陣形をとったりしていました。そのような守備の上達に伴い、攻撃面では、意図的に方向を決めて打とうとするプレイヤーが出てきました。また意図的に空振りを使い守備を惑わせるプレイヤーも見られました。これは「フェイント」として扱われ、有効な方法として価値づけられていました。360度打撃が可能であるというクリケット的要素をうまく活用した例といえます。



バットを使ったクリケット風ゲームの様子

2 中学校の実践例（1年生）

- (1) 単元名：5バッツゲーム
- (2) 実践校：東京学芸大学附属世田谷中学校
- (3) 授業者：菊地 孝太郎 教諭
- (4) 単元計画（5時間）

時間	内容
1	ルール説明・用具の操作（投げる・打つ）
2～5	5バッツゲーム（表1参照）

(5) 授業の概要

〈1時間目〉

クリケットの特徴である「投げる人（ボーラー）はウィケットに当てる、打つ人（バツマン）はウィケットを守る」ということの意味を目的にしました。チームごとに、テニスボールとクリケットバットを使って、打つことを繰り返します。クリケットバットは、ほどよい重さのためミートさせることを意識しやすいようでした。

その後、ゲームのオリエンテーションを通して、ルールの確認を行いました。実際のゲームに移った際には、ルールの理解不足や技能面から停滞する場面も見られましたが、中盤からは概ねボールを打ち出す意味や、意図を持った進塁、守備者（フィールダー）のポジショニングなど、肯定的に状況を考えながら参加する子どもの姿が増えてきました。

〈2時間目〉

授業者は、1時間目の様子からバッティングスキルの改善が必要であると考え、活動中にバッティングに焦点化した指導や教え合いを促す声かけを心がけまし

た。その結果、1時間目にバットに当てるのが困難だった子も、予想を上回るバッティングの向上が見受けられました。しかし、全体的には「投げられたボールを打つ」ということが難しい様子で、この点に関しては引き続き検討することとしました。

また、この時間からウィケットに当てられるプレイヤーをフィールダー全員としました（1時間目は安全面から「ボーラーのみ」とした）。このルール変更により、守備側のパフォーマンス向上が顕著になりました。例えば、普段ボールゲームへの参加が消極的な子も、アウトをとりに行くために、走者のいないウィケットめがけてボールを当てに行く姿や、そのような場面に一喜一憂する子どもたちの姿が見られました。ウィケットをめぐる攻防というクリケットの構造がよく理解されているようでした。走者は守備者の位置を見ながら打つ方向を決め、ボールの位置によって進むか留まるかを判断します。常に意思決定が存在し、それを5人の当事者が行うことが「5バッツゲーム」の特徴です。具体的には、ボールや守備者の位置、走者の動きや声を手がかりに判断していく様子が見られました。当事者間で意思決定を共有するというクリケット的要素がよく機能していると感じました。

〈3～5時間目〉

3時間目からラケットを導入したことにより、前時までは遠くに飛ばすことが難しかった子も、意欲的に打ち出すことができ、打つ方向や打球の質について考える子が増えました。そのため、走者の意思決定の幅は広がり、守備者は、位置を含めた対応が必要になってきます。野球のような定位置という既成概念のない子どもたちにとっては、「どのように守備者として貢献するのか」ということが大きな課題になります。そこで、テーマを「フィールダー（守備者）としてチームに貢献しよう！ あなたの役割は？」としました。具体的に役割を挙げさせたところ、打球を止めたり、中継する人を定めたり、相手の打球の傾向をチームの作戦に生かしたりする子どもの姿が把握できました。時間が進むにつれ、自分たちの定位置が定まってくるチームもありました。360度どの方向にボールが飛んでくるかわからないということもあり、役割は常に状況に依存しているということを理解して、互いに

声をかけながら動いている様子が見られるようになりました。子どもたちの中に、野球のように既存のモデルがない分、ゲームの経験値からわかったことのみで活動が促進していくところもクリケット的要素を取り入れたよさであると感じました。

3 実践から見た成果と課題

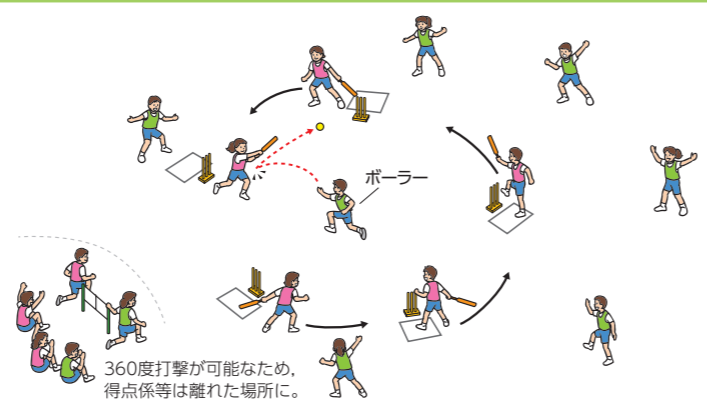
今回紹介した2つの実践では、バットの種類や使用方法が適切になったときにゲームが活性化された印象があります。これは、小学生がバットを使い、中学生はラケットを使った方がよいということを言いたいわけではありません。学習者の理解と技能の状況に応じて適切な用具を適切なタイミングで使用することが必要ということです。小学校の実践では、ボールが「飛びすぎて」、中学校では「飛ばなくて」ゲームがつまらなくなった時間がありました。授業者はそのような状況を見とり、適切に介入することが大切な役割であると改めて感じました。

また、授業づくりで最も議論を要したのが、攻守交替の方法やアウトにする方法についてです。中学校の実践では、当初、打順が一巡すれば攻守交替というルールにしていました。すると、走者はアウトになるまで進塁し続けられればよく、次の罎に「行くか行かないか」という意思決定は必要なくなります。そこで、守備者がアウトにできたときには、守備側に2点入るというルールを設けました。そうすることで攻撃の際にはアウトになるリスクが発生し、クリケット的要素として大切にしたい進塁するかどうかという意思決定を走者全員で共有できると考えたのです。授業では意図通りの展開も見られる中で、アウトになるリスクを恐れ、やや消極的な走塁のチームも見られました。この姿は、よくルールを理解している姿ともとれますが、設定者の意図としては、進塁に成功するかどうかのギリギリ感も味わわせたいという思いもありました。

このことも含めてベースボール型特有のおもしろさを引き出すためにクリケット的要素をどのように取り入れるかということは今後も検討の余地が大いにあります。実践を重ねながら考えていきたいと思えます。

表1 「5バッツゲーム」の主なルール

- 得点：バツマン5人全員が、1つ進塁できたら1点（2つ進塁できたら2点）。
- 人数：フィールドには、バツマン5人、フィールダー7人（うちボーラー1人）。
- 攻守交代：バツマン5人の打順が終わったら交代。
- アウトの方法：① ボーラーが投球でウィケットに直接ボールを当てる ②バツマンが打ったボールをフィールダーがノーバウンドでキャッチする ③走者より先にフィールダーがウィケットにボールを当てる（アウトの場合、守備側に2点が入る）
- その他：バッティングの方法は「バット」「ラケット」の選択制。走者は、バツマンが打ったら進塁できる。ボーラーは打者が打ちやすいボールを投げる。



360度打撃が可能のため、得点係等は離れた場所に。

（イラスト：佐久間広己）



with Sports 「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

ちょんまげ隊長ツンさん

サッカー日本代表サポーター

サッカー好きな人なら、試合のテレビ中継で画面に映り込む“ちょんまげ甲冑姿”の男性サポーターを見たことがあるかもしれない。人呼んで、「ちょんまげ隊長」。そんなツンさんの姿は、国内外の被災地でも見ることができる。サッカーと被災地をボランティアでつなぎ、そこに笑顔を運ぶツンさんの活動を紹介します。

取材・文／荒木美晴

彼の名は、ツノダヒロカズさん。千葉県で靴屋を営む56歳だ。プロ野球ファンだったが、1993年、たまたまテレビで観た「ドーハの悲劇」をきっかけに、サッカー日本代表の応援を始めた。

試合会場では「日本人を象徴する姿で応援したい」と、オリンピック北京大会からちょんまげを着用。手作り甲冑も身にまとい、その出で立ちで会場を歩けば、世界中のサポーターから写真撮影を求められる有名人である。

そんなツンさんが長年、その姿で取り組んでいるのが、地震や豪雨などによる被災地の支援活動だ。きっかけは、東日本大震災。といっても、このときは千葉の自宅や店舗のガラスが割れ、「正直なところ、最初は東北のことを考える余裕がなかった」という。だが、地震から10日ほど経った頃、全国から支援物資が届いているはずなのに、「モノがない」とつぶやく被災者のツイートを見て、心が揺れた。「うちには靴は売るほどある……。これまでボランティア活動はほぼしたことがないけれど、今回くらいは“偽善”をやってもいいじゃないか」。

ツンさんが車に可能な限りの靴を積んで東北の避難所に向かうと、道路が寸断され、余震におびえ、表情が消えた人々の姿があった。衝撃を受けた彼は、そこで思い切った行動に出る。ちょんまげを着けて、子どもたちの前に現れたのだ。不謹慎だと怒られるかもしれない。でも、ツンさんを見た子どもたちは、一斉に駆け寄ってきてくれた。うれしそうなおもたを前に、ツンさんは思わずこう話した。『また来週来るよ』。

1回限りのつもりが、その約束を守り、活動を続けるツンさん。今では東北のほか、熊本地震や西日本豪雨などの被災地にも仲間とともに足を運ぶ。8年間もボランティアを続けられているのは、「無理をしないから」とツンさん。「実は以前、苦手な料理に挑戦して失敗し、土下座をしたことがあります。僕は泥運びも苦手。でも、ちょんまげを着ければ子どもを笑顔にできる。相手のニーズに応えることが大事なのであって、やれないことはやらない。それでいいんです」。

その言葉のとおり、活動の都度「この指とまれ方式」で有志を集め、終わったら後腐れなく解散するやり方を徹底する。「たった一度の参加でもいいんです。その経験を、例えば自分の子どもに伝える、そういう『恩送り』を大事

にしたいと僕は思っているんです」とツンさんは話す。

被災地の現状や活動内容を伝える講演会は、国内外でのべ350回にのぼる。「あと5年は続けたい。その間にいろんな人に種をまきたいんです」。

その種は各地で確かに開花し始めている。2014年のワールドカップ・ブラジル大会、2018年のロシア大会には募金を集めて被災地の中学生を招待することができた。ロシアでは、参加した中学生が福島の実況を報告。「赤の広場」では、ロシア語と英語で書かれた感謝の横断幕を広げ、他国サポーターと交流を深めた。

2016年には、東日本大震災復興支援として福島県南相馬市の小中学生によるマーチングバンドのドキュメンタリー映画『MARCH』を制作。バンドの活動を知ったJ2リーグの愛媛FCとの交流を通して、「福島のいま」と「夢を諦めない」気持ちを描く。大反響を呼んだこの作品は世界10か国以上で上映され、1回3万円～の素材の有償貸出による収益は、バンドの活動費や南相馬の子どもたちへの支援活動に還元されている。

スポーツ、被災地、世界の人々との関わり方にはいろいろな形がある。それを、ちょんまげ隊長ツンさんは私たちに教えてくれている。



PROFILE ● ちょんまげたいちょう つん

千葉県出身。ちょんまげ甲冑姿で世界を巡る、サッカー日本代表サポーター。東日本大震災を機に、サッカーのネットワークで被災地支援をスタート。世界各地で取り組む「被災地講演会」は8年間で350回以上開催している。多岐にわたる活動は、「Smile for Nippon」WEBサイトで確認できる。2016年に制作した映画『MARCH』は、学校での自主上映会開催も可能。問い合わせは映画MARCH制作委員会 (eigamarch@gmail.com) へ。

学研・教科の研究

第4号 体育・保健体育ジャーナル

『小学校体育ジャーナル』(通巻91号)

『中学校保健体育ジャーナル』(通巻117号)

平成31(2019)年4月発行

発行人…甲原洋 編集人…木村友一 発行所…(株)学研教育みらい デザイン…宮塚真由美 表紙オビイラスト…丸山誠司 印刷所…(株)廣濟堂

●お問い合わせは、「小中教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル 内容については▶TEL. 03-6431-1568 (編集) それ以外のことは▶TEL. 03-6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

●「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版は、上記WEBページから。

●電子版(iOS用)は、「ブックビヨンド」から。